朝の法話　第十八回　十一月一日

全校のみなさん、おはようございます。

今日から十一月に入りました。だんだんと冬の足音も近づき、さらには、一年の終わりも見えてきました。

十一月には、報恩講や生徒会役員選挙など、さまざまな行事がありますが、来週には強歩大会が控えています。

伊那西高校にはさまざまな行事がありますが、その中でも「自分との戦い」という意識を特に強く持つのが、この強歩大会という行事ではないでしょうか。クラスというチームで競うものではなく、相手は「自分」という存在で、その自分と戦うのも「自分」一人です。

自分が自分と向き合うこと、それは、強歩大会に限らず、とても孤独な戦いと言えるかもしれません。

「スッタニパータ」という、お釈迦様の言葉をまとめた本の中に、次のような言葉がります。

犀の角のようにただ独り歩め。

犀の頭部に生える大きな一本の角のように、独りで自らの歩みを進めなさい、という意味の言葉です。インドのサイは、群れではなく単独で行動することが知られています。ですから、「犀の角」という表現は、すなわち「孤独」を意味しているのです。

「孤独」は、マイナスなものであると捉えられているかもしれません。しかし、お釈迦様は「犀の角のようにただ独り歩め」とおっしゃって、「孤独」は避けるものではなく、むしろ私達が「孤独」になることを勧めておられると言えます。

「孤独」は避けなければならない、と私達は考えるかもしれませんが、一方で、私達が生活の中で苦しめられるのは、人間関係によるところが多いのではないでしょうか。強すぎる人間関係は「束縛」を生みます。それが強ければ強いほど、関係が壊れてしまったり、そこからこぼれ落ちてしまったりしたときのダメージも大きくなってしまいます。

「絆」という言葉がよく言われた時代がありましたが、もともと「絆」とは、家畜を縛るための綱を指します。お互いがお互いを自分の都合よくコントロールし合うような、そんな人間関係をいつの間にか作ってしまっているのではないでしょうか。

人間が何かに強くこだわり心を奪われていくことを仏教では「執着」と言います。その執着を離れるために、お釈迦様は、「犀の角のようにただ独り歩め」と、「独り」になることを勧めておられるのではないでしょうか。